平城京右京三条一坊二坪・朱雀大路の調査（平城第577次）

奈良文化財研究所では、国土交通省が進めている史跡朱雀大路跡の整備にともなう発掘調査を、2015年から続けてきました。今回の調査区は、奈文研ニュースNo.64でも紹介した平城第578次調査区の、南方約150mの位置にあたります。平城京右京三条一坊二坪における、朱雀大路西側溝と築地塀の位置や規模を確認することを目的に、発掘をおこないました。調査期間は2016年12月２日から翌年１月31日まで、調査面積は120㎡です。

調査の結果、東西の両肩に木の杭列をともなう、幅3.1～3.4m、深さ1.0～1.1mの南北方向の溝を検出しました。この溝が朱雀大路西側溝とみられ、これまでの調査区で確認された西側溝の規模とほぼ同一です。この溝のさらに西側には、幅約１mの平坦な犬走りをはさんで、きめの細かい土を積んだ築地塀の基礎とみられる土層を、幅4.8～5.0mの範囲で確認しました。さらに、築地塀より西側の坪内についても、南北4.5m×東西５mの範囲を発掘しましたが、顕著な遺構はみつかりませんでした。

また、この溝の中からは、木簡や人形、和同開珎や土器・瓦等の奈良時代の遺物も数多く出土しました。特に、木簡の中には「養老三年（719）」の紀年をもつものがみつかり、この溝の時期を知る手かがりになります。

本調査を通じて、平城宮朱雀門の正面周辺の様相が、一層あきらかになりました。朱雀大路跡の整備にともなう発掘調査は、これで一段落となります。

（都城発掘調査部　庄田 慎矢）

検出した朱雀大路西側溝と朱雀門（南から）

平城京左京一条二坊十坪の調査（平城第583次）

今回の調査は、現在、田園と住宅地が混在した風景が広がる、平城宮の東方、法華寺の北方でおこないました。平城京左京一条二坊十坪の北西隅に位置すると想定されます。奈良文化財研究所では、同坪について、住宅建設等にともなう比較的小規模な発掘調査を積み重ね、当該地の遺跡の解明につとめてきました。

今回の調査区も、39㎡とやはりそれほど広くありません。周辺の調査成果から、坪を区画する施設や建物の検出を想定していました。ところが意外にもみつかったのは、真っ黒な整地土の広がりと、真っ黒な埋土をもつ２条の東西溝と長方形平面の土坑でした。

真っ黒な土を掘ってみると、炭化物や坩堝・羽口・鉄滓・銅滓・炉壁片等、冶金に関連した遺物が非常に多く出土しました。いっぽう、遺構面自体が焼けて硬化している様子はありませんでした。おそらく、本調査区は近傍に所在した冶金関連施設の廃棄に関連する一角であったと想定できます。

小規模ながらも、平城宮や法華寺の造営の具体的な姿を示唆する大きな成果を得ることができた調査となりました。引き続き規模の大小に関わらず、十分な注意を払って調査に臨みたいと思います。

（都城発掘調査部　鈴木 智大）

真っ黒な埋土をもつ東西溝（中央部、北東から）